

規制委は汚染水の海洋流出の責任をとれ

原発再稼働どころではない！ 再稼働審査の中止を！



原子力規制を監視する市民の会 阪上 武

福島第一原発の汚染水問題は、排水路から外洋への放射能流出が、1年近く前から把握され、原子力規制委員会に報告されていたにも関わらず、東電も規制委も対応を怠っていたことが明らかになる中で、状況は大きく動いています。

◆排水路から外洋への放射能流出を放置していた

2月22日に福島第一原発の排水の放射能濃度が上昇し、警報が鳴りました。別に24日には、2号機の建屋屋上で非常に濃度が高いたまり水があること、この一部が外洋に通じるK排水路と呼ばれる排水路に流れ込み、そのまま港湾外に流出したこと、そして、同様なことがこれまでも発生しており、東電は昨年4月以降のモニタリングにより確認していたことが明らかになりました。東電はこのデータを公開していませんでした。

この問題では、東電のみならず、規制委の怠慢ぶりが明らかになっています。東電は、さらに遡った2013年11月に、問題の排水路で、放射性セシウムなどの濃度が基準を超えて高いことを把握しており、規制委の検討会にも報告していました。

◆再稼働の審査よりも汚染水対策を優先すべき

東電は、2014年1月の汚染水対策ワーキングではじめて規制委に報告しました。外洋につながっている排水路について、港湾内に付け替えるよう提案する規制委に対し、東電は「検討します」というだけでした。2月の検討会では、東電から、排水路周辺を年度内に除染し、特に線量の高い2号機周辺については先行して実施するとしていました。東電は今になって、高い線量で作業が困難だったと釈明しています。東電は4月から毎週の放射線測定を始めます。検討会では、データの取り方について議論がありましたが、その後東電はデータを規制委に報告することはなく、規制委側も何も要求していませんでした。完全に放置していたのです。

規制委は本当に放射能による海洋汚染を少しでも防ぐつもりはあるのでしょうか。規制委はいま、多くの時間と人材を、原発再稼働のための審査に投入しています。そのようなことをしているわけではありません。再稼働の手続きを止め、この汚染水対策のため、海洋の放射能汚染を防ぐために全力を投入すべきです。

◆汚染水のこれ以上の海洋放出は許されない

東電と国は、福島第一原発で溜まり続ける汚染水について、海洋への放出を行おうとしていま



東京新聞 2015. 2. 25より

す。地元の漁業者に対して、地下水の水位を低下させ、新たな汚染水の発生を防ぐという名目で、原子炉建屋近傍のサブドレンと呼ばれる井戸からくみ上げた水を、処理した上で海洋に放出する計画です。昨年の地下水バイパスの放出に続き、「苦渋の決断」を迫っています。



汚染した地下水の海洋放出の先には、より汚染度の高いタンク中の汚染水放出があります。東電は、いまタンク中の汚染水は24万トンであり、これがこの5月にはすべて処理されるとしています。まるで汚染水がなくなるかのように宣伝していますが、実際には、トリチウムを除くことはできず、処理された後の水も大量の放射能を含む汚染水です。福島第一原発のタンク群には、1,000兆ベクレルもの放射性トリチウムが溜っています。汚染水の総量は、現状で61万トンを超えており、1日300トンのペースで増え続けています。

タンク中の汚染水について、本来なら、環境中への放射能放出を防止する役割を担うはずの原子力規制委員会は、こともあろうに基準濃度以下であれば海洋放出をするよう積極的に促しています。田中委員長は、今年1月19日にタンクで発生した労働者の落下死亡事故が、まるで漁業者が海洋放出に反対しているせいであるかの暴言を吐きました。

1,000兆ベクレルのトリチウムは、福島第一原発6機分の年間放出基準値の約50倍です。事故前の放出実績で言えば約500年分に相当します。福島第一原発の港湾内には、事故以来、原発から流れ出た膨大な放射能が蓄積し、湾外への流出が続いています。トリチウム以外にも、セシウムやストロンチウムなどさまざまな種類の放射能が流出しています。そして、今現在でも北側や南側の湾外の放出口付近では、1リットル当たり数～十数ベクレルの放射能が観測されているのです。激しい雨の後では、二十ベクレルを超えることもあります。これ以上の海洋放出は許されません。

◆もう一つの問題…新規制基準適合性審査で汚染水対策が行われていない

汚染水の発生源は、格納容器下部に開いた破損口です。どこがどのように壊れたかは不明ですが、炉心に注水した冷却水が、破損口から流れ出て、建屋で地下水と混ざり新たな汚染水を生み出しているのです。

このような状況を生まないためには、建屋の止水を完全にするなど対策が必要です。新規制基準も、格納容器が破損しても放射能が拡散しないための設備を設置するよう要求しています。再稼働が問題になっている原発については、川内でも高浜でもそのような対策は一切ありません。格納容器の上部から気体状で出た放射能に対して、放水砲で撃ち落とすという対策しかありません。このような状況で再稼働を許すべきではありません。

排水路問題で事態は大きく動いています。いわき市漁協は、地下水の海洋放出について判断を見送りました。組合長は「怒りの言葉ばかりで議論は先に進まなかった。」と述べています。全漁連は東電への抗議文で、すべての排水路の放射能の流出の早急かつ完全な防止対策を要求しています。漁業者ばかりではありません。市民も住民も怒っています。放射能の海洋放出を許さないよう、また、汚染水の深刻な実態から、とても再稼働どころではないことを訴えていきましょう。